

メッセージ

アウトライン

2020. 6. 14 北見 ch

『あなたに言う。起きなさい。』

ルカの福音書 7:11-17

7:1-17節には2つの奇蹟の記事が記されている。第一はカペナウムでの、ローマの百人隊長のしもべのいやしであり(1-10)、第二はナインの町のやもめの一人息子を生き返らせた記事である(11-17)。

I. 百人隊長のしもべのいやし(1-10)

イエスが町や村を巡回したのは、神の国を説き、その福音を宣べ伝えるためであった(8:1)。この「神の国」とは、イエス・キリストにおいて神が王として支配されることである。また、キリストを見る霊の目を開かれた者は、彼と共に神の国が到来したことを認めることができる。それ故、イエスがローマの百人隊長のしもべをいやした事件は、神の国が到来したことを示す一つの典型的な証拠になるのである。

ではどのような点でそれは証明されるのか。それは第一に、しもべは「病気で死にかけていた」(2)。さらに遠く離れた所にいるイエスのことばだけで、しもべは「良くなっていた」(10)からである。

ベタニヤ村のラザロが死んだ時、ラザロの姉妹のマルタとマリヤは、共に「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」(ヨハネ 11:21)と言った。彼女たちはイエスの力を信じていたが、その力も遠距離では発揮できないという条件を付けていた。しかし、ルカがここに書き留めた百人隊長の信仰は、そうした条件付きのものではなかった(ルカ 7:6-8)。

イエスからいやしの約束のことばさえいただければ、そのことばには力と権威があるのだから、遠く離れていようと自分のしもべは、たちどころに直ると信じている。その信仰には、イエスも驚嘆するほどであった。「…わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことはありません」(9)。

II. ナインの町のやもめの一人息子を生き返らせる(11-17)

それから間もなく、イエスと弟子たちはナインの町のやもめの一人息子が死んで、棺に入れられて担ぎ出される所に来合せた。その母は泣いていた。無理もない。彼女にとってその息子はたった一人の家族であり、心の支えであったのだ(11-12)。イエスは、「その母親を見て深くあわれみ、『泣かなくてもよい』と言われた」(13)。「そして近寄って棺に触れると、担いでいた人たちが立ち止まったので、『若者よ、あなたに言う。起きなさい。』すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めた。イエスは彼を母親に返された」(13-15)。これも、イエスのことばによって起った奇蹟である。

しかし、死人が生き返るといふのは、数多い奇蹟の中でも特に人々を驚嘆させる。イエスが死人を生き返らせた例として、聖書はほかにもベタニヤのラザロ(ヨハネ 11:1-44)と、会堂管理者ヤイロの娘(ルカ 8:40-56、マタイ 9:18-26、マルコ 5:21-43)の記事がある。

ルカは、先の百人隊長のしもべのいやしに次いで死人が生き返った事件を記して、神の国の福音は、病気だけでなく死の領域にまで救いをもたらすことを明らかにした。

この箇所から教えられること

- ① 神のことばには、力と権威があるので距離や時間に制限されない。
- ② キリストの力と支配は、病よりも死よりも強い。
- ③ 神の国の支配を知る者には、大きな喜びが与えられている。

※ 神のことばには力と権威があることを経験したことがありますか。

※ キリストの力と支配を知る者として、何を願い祈り求めますか。